

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】山越裕太

【所属】(助成決定時) 獨協大学 外国語学部

【研究題目】戦間期の植民地間協力から世界保健機関アフリカ地域事務局へ——国際連盟保健機関、パン・アフリカ保健会議、イギリス帝国——

【研究の目的】(400字程度)

本研究の目的は、戦間期に開始されたアフリカの植民地間協力が現在の世界保健機関アフリカ地域事務局(WHO Regional Office for Africa、以下、AFRO)の活動を基礎づけたことを明らかにすることにあつた。

これまでの植民地に関する研究は、植民地間協力や植民地独立前後の連続性を検討する視点が欠如していたと言える。しかし、戦間期 1932 年にはイギリス帝国の植民地の一つ南アフリカ連邦が地域保健会議の開催を提案し、それによりパン・アフリカ保健会議(Pan African Conference)が開催されていた。同会議は 1935 年にも開催され、戦後 1951 年には AFRO が設立された。この一連の経緯を踏まえれば、アフリカの多くの植民地は、独立以前に植民地間の協力体制を構築していた可能性が浮上する。そこで本研究では、パン・アフリカ保健会議を主催した国際連盟保健機関や同会議を巡る植民地間の協力、AFRO の設立過程に焦点を当て、どのように植民地間の協力体制が形成され、また、それが独立後に引き継がれたのか、AFRO の設立にどのような影響を与えたのかを解明を試みた。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究では、アフリカにおける保健衛生分野の植民地間協力の形成過程とその協力体制が AFRO に接続する過程を明らかにするため、初めにパン・アフリカ保健会議の事実関係と関係主体相互の関係の究明を試みた。国際連盟保健機関は南アフリカ連邦の提案を受けて、1932 年にパン・アフリカ保健会議を主催した。当会議には国際連盟保健機関の担当者及びアフリカ植民地で活動していた保健衛生分野の専門家が参加した。そこでは主に黄熱病やペスト、デング熱などの伝染病や飛行機など移動による伝染病の拡大という課題が検討された。この会議によって直ちに伝染病予防や人の移動による伝染病拡大という課題が解決されたわけではなかったが、植民地各地域の保健衛生分野の専門家が情報を共有し、意見交換する貴重な機会となった。そして 1935 年に第 2 回パン・アフリカ保健会議が開催された。当会議には英領植民地に加え、仏領、ベルギー領、ポルトガル領の植民地からも専門家が参加した。当会議は、植民地間会議という特徴を有し、アフリカ内での人的交流活動や今後も継続してパン・アフリカ保健会議を開催していくことに合意した。しかし、それ以降は国際情勢の変化、世界大戦などにより会議は開催されなかった。

続いて、上記の植民地間協力の経験が AFRO に接続する過程を究明するため、AFRO の設立過程を検討した。AFRO の設立過程における一つの争点は、地域事務局の活動範囲にあつた。世界保健機関のアフリカの地域事務局構想は、中央アフリカ地域事務局と南アフリカ地域事務局という複数設立構想から単一のアフリカ地域事務局構想に収斂していく道筋を辿った。1950 年には、AFRO 設立のための規定、財源、本部、人員などを含む具体的な計画が準備された。研究期間では、以上のようにパン・アフリカ保健会議及び AFRO の設立過程を分析した。

本研究は国際連盟資料館や英国国立文書館の刊行・未刊行史料に依拠した。研究成果は学会報告や学術論文として公開する予定である。

【結論・考察】(400字程度)

本研究を通じて、パン・アフリカ保健会議によって植民地間協力が構築される過程を一部明らかにするこ

とができた。また分析を通じて、植民地間協力は保健衛生分野に限られたものだったのか、他分野から波及した可能性はあったのか、国際情勢が緊迫していく 1930 年代になぜアフリカで協力が進んだのか、といった課題も浮上した。今後はこれら課題も念頭に置きながら分析を進めていきたい。AFRO の設立過程に関する検討では、活動範囲の構想が収斂していく過程など、争点を一定程度明らかにできた。しかし、AFRO の設立過程で植民地が果たした役割や、英仏などの宗主国の立場、AFRO の設立とその後訪れるアフリカ植民地の独立との関係など、検討すべき課題を残した。今後も史料など補足し、以上の課題をさらに分析していく。